

## 日本金融学会の活性化について

一橋大学名誉教授 花輪 俊哉

### I、日本金融学会の活性化について

学会の活性化を、私のような年寄りに訊くのはどんなものか。昔シュンペーターは 20 歳台で資本主義経済の理論の枠組みを完成させ、年とった後はそれに肉付けしていっただけだと昔聞いたことがある。どこの分野でも、やる気のある若い人がどんどんでてくるようにしなければ発展することは出来ない。

こんな話を聴いてもう手遅れかと大いのがっかりしていた時のことである。LSE で活躍されていた森嶋先生に食事をご馳走してもらった時、経済学は若くしてはわからない。いろいろ勉強した後で、はじめて理解できるものだという話や、それ故経済学は数学などと違い 50 歳台からであるという話を聴き、なにか少しホッとした事を覚えている。年をとってもなおやれる分野もあることを信じたい。

### II、答申の認識について

「日本金融学会の現状についての認識・理解」の(I)に次のような説明がある。

[金融学会は「伝統のある学会」であるが、その対象領域の money and banking は「相対的に縮小傾向」にあり、最近では finance が重要性を増している「成長分野」である。]という認識をもっているようである。money and banking から money and finance への転換が頭にあるらしい。しかし両者には共通点があるように思う。金融学会の研究対象が前者に限定されるという考え方には賛同できない。

そもそも貨幣の研究は、交換市場を考えていた。生産者と消費者が、それぞれ価格に依存して行動するならば、市場で需給と供給が均衡するという形で市場を考えることは現実的ではない。現実には両者の間に商人が存在し、商人が商品の需給に関与しているのである。ここで重要なのは、交換は物々交換ではなく貨幣を使用する間接交換だということである。また商人もしくは商人機能が市場での需給に関与することは、フローの需給均衡だけでなく、ストックをも考慮する事を意味している。さらに商人機能は、単独である場合もあるし、また生産者や消費者と結合して活躍する場合もあると考えられる。

金融市場においては当然銀行が、そうした金融的商人と考えられる。そして銀行は商業銀行のほかに投資銀行も当然含まれる。外国為替市場でも同様に考えてゆくことができる。このように商人機能を入れて、市場活動を見ていけば、金融学会の活動について、狭く限定する必要がないと考える。原理的なものから応用的分野にいたる種々なる研究に力を注いで欲しい。